



古今著聞集

三

記和文

號 179

冊 20冊, 内

文庫





古今著聞集卷之三

政道忠臣三

治世の政方法魔は是別表仁使官長以忠  
 表者憂世長者三事君長合新上下和睦者  
 延壽聖王位傳せたりはて後中流者大臣管  
 定必朝臣季長物長者英雄物長は又人々心と  
 願向亦毛それりりね道とて宣事法皇治中とせまひる  
 く是れ先王せまひる所なりと記する之れ泉苑正  
 教と乾陰閣とをいふ近儒の名物別表はして  
 天下つひは世親王て日月の皇官法は世をり又





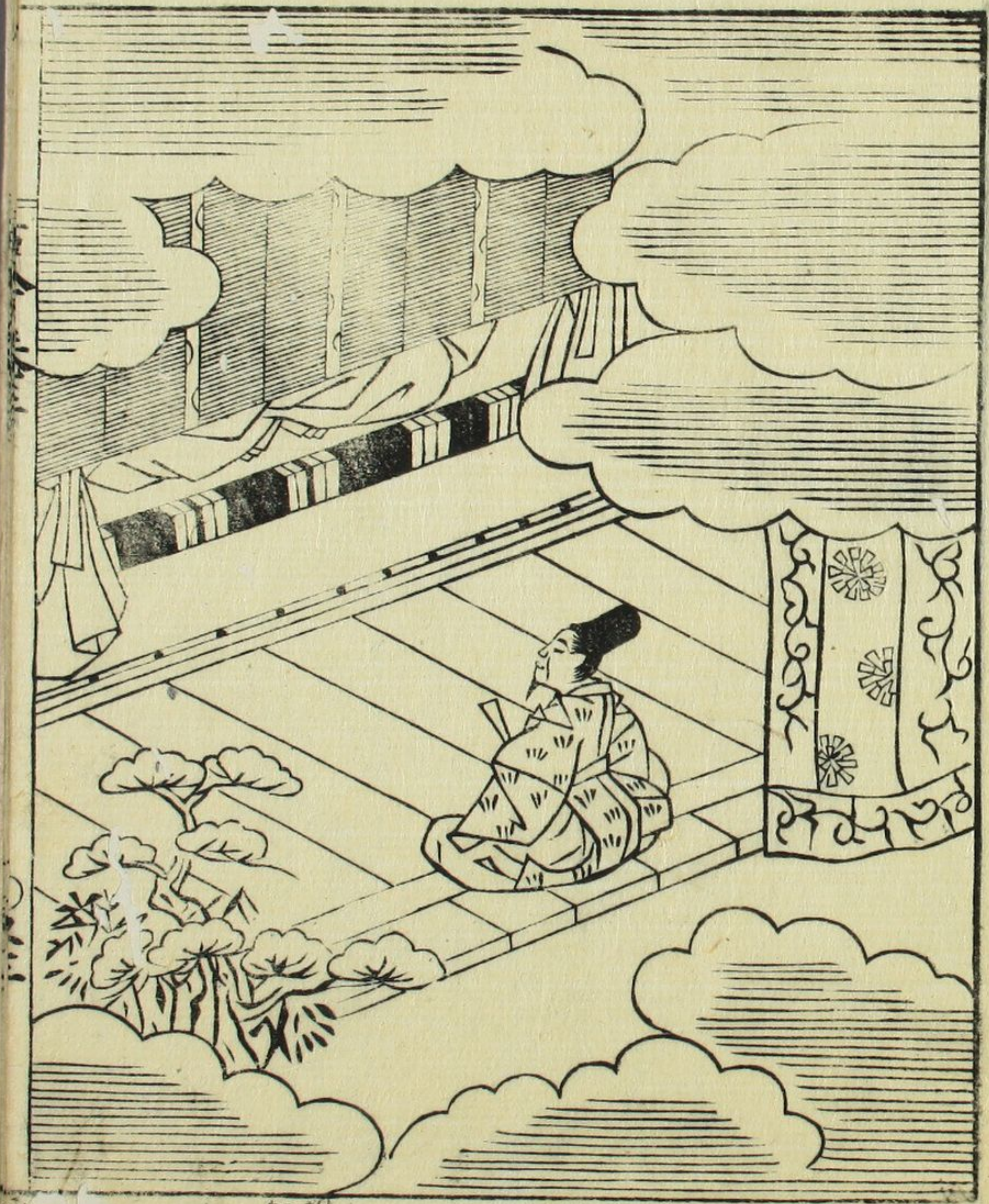
かうやりせらるるはあそび人となきりゆらんをりふ  
やこれぞだそこのさあま被<sup>い</sup>あそそ者<sup>う</sup>府<sup>が</sup>向<sup>か</sup>いし  
畏<sup>おそ</sup>のりしとせしきをいれ人<sup>ひと</sup>をばれそれく懐<sup>なご</sup>柔<sup>な</sup>の  
す法<sup>しよ</sup>とべらききり

由<sup>よし</sup>願<sup>がね</sup>又<sup>また</sup>及<sup>およ</sup>九<sup>く</sup>条<sup>じょう</sup>及<sup>およ</sup>由<sup>よし</sup>同<sup>どう</sup>車<sup>しや</sup>あく如<sup>ごと</sup>仕<sup>し</sup>せと務<sup>む</sup>給<sup>たま</sup>き由<sup>よし</sup>時<sup>とき</sup>  
由<sup>よし</sup>車<sup>しや</sup>の三<sup>さん</sup>重<sup>じゆう</sup>ふとに一<sup>いつ</sup>人<sup>ひと</sup>をいのせしゆけりそわり  
きり又<sup>また</sup>宗<sup>そう</sup>院<sup>いん</sup>の大<sup>だい</sup>およ一<sup>いつ</sup>条<sup>じょう</sup>大<sup>だい</sup>おた者<sup>しや</sup>大<sup>だい</sup>おあく同<sup>どう</sup>車<sup>しや</sup>  
あくゆそいれきりけはは父子<sup>ふし</sup>同<sup>どう</sup>車<sup>しや</sup>れりそまれの寛<sup>かん</sup>元<sup>げん</sup>  
二年<sup>に</sup>賀<sup>か</sup>茂<sup>しやう</sup>信<sup>しん</sup>時<sup>じ</sup>祭<sup>まつり</sup>の時<sup>とき</sup>二<sup>に</sup>条<sup>じょう</sup>前<sup>ぜん</sup>及<sup>およ</sup>宮<sup>みや</sup>白<sup>しろ</sup>一<sup>いつ</sup>条<sup>じょう</sup>前<sup>ぜん</sup>及<sup>およ</sup>大<sup>だい</sup>  
長<sup>ちやう</sup>あくまのりわの給<sup>たま</sup>ひはにふ書<sup>かき</sup>てゆりそそし

由<sup>よし</sup>同<sup>どう</sup>車<sup>しや</sup>あく二<sup>に</sup>条<sup>じょう</sup>宗<sup>そう</sup>院<sup>いん</sup>町<sup>まち</sup>よあてきて由<sup>よし</sup>人<sup>ひと</sup>おわりきり  
そ後<sup>ちのち</sup>法<sup>ほふ</sup>成<sup>じやう</sup>古<sup>こ</sup>れ由<sup>よし</sup>八<sup>はち</sup>講<sup>かう</sup>よまのそまひきりた府<sup>ふ</sup>れ由<sup>よし</sup>車<sup>しや</sup>  
とじかろあそそ法<sup>ほふ</sup>成<sup>じやう</sup>ちへ厚<sup>あつ</sup>をそいりるの程<sup>ほど</sup>宮<sup>みや</sup>白<sup>しろ</sup>  
の由<sup>よし</sup>人<sup>ひと</sup>の由<sup>よし</sup>車<sup>しや</sup>れそた府<sup>ふ</sup>の由<sup>よし</sup>人<sup>ひと</sup>の由<sup>よし</sup>車<sup>しや</sup>れ後<sup>ちのち</sup>よ  
そ打<sup>うち</sup>りきる前<sup>ぜん</sup>近<sup>ちか</sup>ハわひきりきりきりきりきりきり  
そあそ世<sup>よ</sup>の人<sup>ひと</sup>のゆー

後<sup>ちのち</sup>三<sup>さん</sup>条<sup>じょう</sup>法<sup>ほふ</sup>由<sup>よし</sup>時<sup>じ</sup>隆<sup>りゆう</sup>方<sup>かた</sup>が権<sup>けん</sup>在<sup>ざい</sup>中<sup>ちゆう</sup>并<sup>へい</sup>あくゆりきりきりきり  
実<sup>じつ</sup>政<sup>せい</sup>と在<sup>ざい</sup>中<sup>ちゆう</sup>并<sup>へい</sup>あそれきりわした隆<sup>りゆう</sup>方<sup>かた</sup>信<sup>しん</sup>保<sup>ぼ</sup>  
つとめていれれど由<sup>よし</sup>人<sup>ひと</sup>あそそ世<sup>よ</sup>をわりしゆりきり  
まそらきまひきりしそ同<sup>どう</sup>院<sup>いん</sup>律<sup>りつ</sup>令<sup>れい</sup>式<sup>しき</sup>格<sup>かく</sup>ふたがた

と宣命にうせをせぬりせざるを賢仲にあれり後  
 せしそ中をせしぬりめおふとせよたがひしるるた  
 ばいそくかくいしをせぬりや割しまひせざるに  
 かりうせをせかりしにたるいその宣命れゆかやとぞ  
 人々るお捕中相らに信よかぬくゆあるい人の屏風  
 れかりぬるしとて屏風のうぬるうひこのつれがとあ  
 かりむとばさるてしうれをたあてしほほ人れあありよ  
 うほりくになりぬきぶえぬとて屏風のやうにひと  
 わほろしなれど実うほりしとらふり川ぬりや  
 ゆるとらや





いそごのゆあへありて御銀爾玉れおのひやんとごころひ  
 まゝせられどふりうりらへ御ぞと物言あひせり  
 介れ室物よもよこふらひまひせてふゆの物言と  
 取せり申あふありて佛興とてに南あふよせとせ  
 し御言ひたりふせりけふ早くつてふふゆふせり  
 の下りせ御ぞ

酒太右左衛門中院右衛門と越へ右大納言ふより  
 保延六年十二月十六日実徳但右大納言同年十一月  
 二日肉大官禪左大納言十二月七日雅定但右大納言  
 治右左衛門大官左大納言とて御言を御言中院右衛門

まうにちたおと禪とされたりを方に宗徳院酒太  
 右左衛門と左大納言とせんと思ひ先してふらぐくおと  
 所れより中院右衛門と右大納言とをりふ批  
 させ給ふれおと申よりをりて保延六年十一月廿  
 二日に院進勝為丸の陸にお申よりて作下より中  
 と妙くお煙へはよとやせあをれんらうおまひ世  
 及そを御言作よりせんごおりの御言と  
 先方延尉佐中清政政ふつとありをりてぬれ御言  
 里を御言よ御言とてより睡自久陽おむひくを  
 申より侍ふおひとよりをりてぬれ御言と

しきながつりく先方の辨状をうたぐりたりとて  
途まじりせしむれけりしにてとくせしむ

治承元年六月二日福原の事ありりまをるに同十三  
日帥の大御を陸奥に新敷よき者ふん侍りせり  
大なる座のまじりりふあつるにせしむ  
女房わりのつぐまに類よあく一ある由もみく  
よ女房のいふやうあれそとやころ侍りよを侍るの  
うをせまらぬるあくいぞやいひそりまれりし  
又新よりを侍るは甲やうにたてざりおそれぬ  
次日れ新侍ふ事とてお大御を新細別者侍るに

かたりてきりた段入つてとされぬもいと  
なうりたりと海をて人の妻よ還侍ありと  
のうり衣をえ新渡の中もふさあつぬ  
ろひとて地侍ふとと見くさあぬま  
産れ福むやせしむり十月廿五日平  
みをれぬかの妻よふうりせり  
とこれあどのあんとぞせえ侍る  
伊豆北の流人前治承侍新侍謀及れ  
追討使かお推登新侍るの事  
ホとこれよりきれぬ海原の事



巡討使の風道より入りふきりかゝる程は世の中ふ  
 づろあつたりをれど十月廿日新使の命下中へ東謀  
 及此の評儀をたりけの由門なる居なるお師陸毅  
 大領を新大領を長方更なる年集れたりをり乃亦  
 孫房胡良編云のひひ我お海を多新よなる亦教  
 云しやけりらひとくよは多仍德改漢高被孫云兼  
 平年中よは將門謀反和漢隋存之破於今夜ハは  
 月の甲小十の由皆反出討く改者多付天を死之愛  
 任皇八代代帝皇父祖也云版不知合天下始元可保  
 合政勢を又ハ通冥白被漢海和く思ふ可為據也

恭帝よりこの世を治む徳はゆるくこれ多改くをれり  
 他人公也と德政をりもくさむむもぞやこれ徳は  
 ありゆハさくきざりをり任皇五年のそより改は正  
 なる下也なりがされを多ひ一幸ハ此也か平と改ハ  
 道の徳はりして侍りをりた多亦おそくおりくさく  
 中さける所りがたるくハ方もさるが理をばらとて  
 重なる也やも後程ゆく十二月八日より任皇の命下も  
 中同十六日入る下もびせん此中より海濱せし務法をり  
 公事一書に  
 正綱此書多あり除の巡備おけるまぐさる此礼のよ

わづむたをいひて居候まらぶまされたり凡恒例臨時  
此大小軍西入記如山抄とてそそ懸後よされたりわ  
時々九事取の事流傳極其そのうりめおれくはるや  
多祇のあまの夢ひ傳令今八後多しはいひたさ事なり  
今後取付候よなきせまひく後能通臨時の案は常人  
と解たりざる時そのうりめ今後取付せ候まらり案  
同軍小参りて他をざる人長慈時能通とたふれん  
あらあら人の足抱せ候かといひたり事候いひて  
くそ候りき候

一条院臨時常節より上との目録よりわづむたに起後

まのたけ川をたはむ上人よりいひて候り序は不難とて  
て力強い處とのまの五都よりして鞭をたふる序は  
うりて指針く極人よんせされたりをたぐる候  
よゆりてそそ起後やがまらり

万末二年踏歩の事今書大内赤ゆ陣は付く  
宣令見来とんねを極る入陣の事ふふ之位の序は  
除房の候おらむがう大御を舟位に懸壁とせられ  
だんく徳みわをりきり指大御を成候の事備後  
扇はあつて厨内よりおられり曆よあるんおふ  
先扇より書つりけるゆやそそ書おは隆御親長系

わひく妙扇よりくるくもをきくればいふ礼と記  
きりて致されりやぞと指原をきくは母信にぞく  
らみおきりもせよらうらうらとせし中りしをい  
かほせそ世の人のいひなほ

今度大細を陸奥に侍りおきりける年候時の陸奥  
津うまの心なほはとよほられぬは後よりて紫衣  
らけぞい夜ひさくはして並序におされりけるは宇佐  
直を致とりりてはるは平をぬりせきりなれどはさわ  
ぐりふとやうぞくはつらわれりきり

いづれの年ふら白ききふ小進士別及者未だ強件より

よりきふは難記きとまはる物やうりきれんちうちやうぞ  
捨北遠使にぞ退せんとしきふやゆは信にぞわの呪  
當然と記ありてあのみよりの海りぬえをわしと強と強仲  
がわらとりて先しとらりてきしじきり細よと大を強あて  
はの當然ととまきるあよのありて文圖ととうちあて  
とものく作のとう一強やを信とら強とやいんを強  
とらきり時よのぞとていみじのりきり叙感ありてせ房  
れ強はゆぬりせきりなれん

寛治八年四月二日ある陸奥密をきりたるは房  
右大臣内大臣よりきりしきりて者ゆきひりれなれん

三云此よりして味しあひまう下なるは乃有生下  
 此教久書有前証表海持も感雅成南階のあよりて  
 西長とぬさしてありせきり肉を信中細を申おる者より  
 まらみより給くこれあぬらわあはひとくおつり出  
 されより中細を申おつてさうしては弟拙とい敷久小徳ひ  
 打衣よの聖雅よ、はを信先親わきとも謝ふのぞとて  
 西國ゆゝしそで坊よりあよ中又清方信時客よん  
 多給より催る系細源をくもく教斗新練羯その弱  
 ちとれおまひより測解此真く免くやうも坊ん久安三  
 年十一月廿月聖のそあ合肉を信肉赤とつともぬはひもん

中へ膝雲とさうぬよ書及お大印記ぬれよりた道お  
 大為久系あまひひごつて成くさめけしりきり結がたを  
 ありのあよりやうしほよおくく久系と免く感ド  
 まひを信とぬん  
 仁平元年正月一日院移礼をきり八条を改大長七  
 十二よりおまらあひよりきり一むび移してやうひ移  
 しぬひよりけりも推記よんへき信とわ同二年中を  
 又うきとまを信  
 仁永元年正月一日中元祿理繁塔河左大長の一階再  
 校し給ひよりと免くしや宝治元年院移礼よ後久

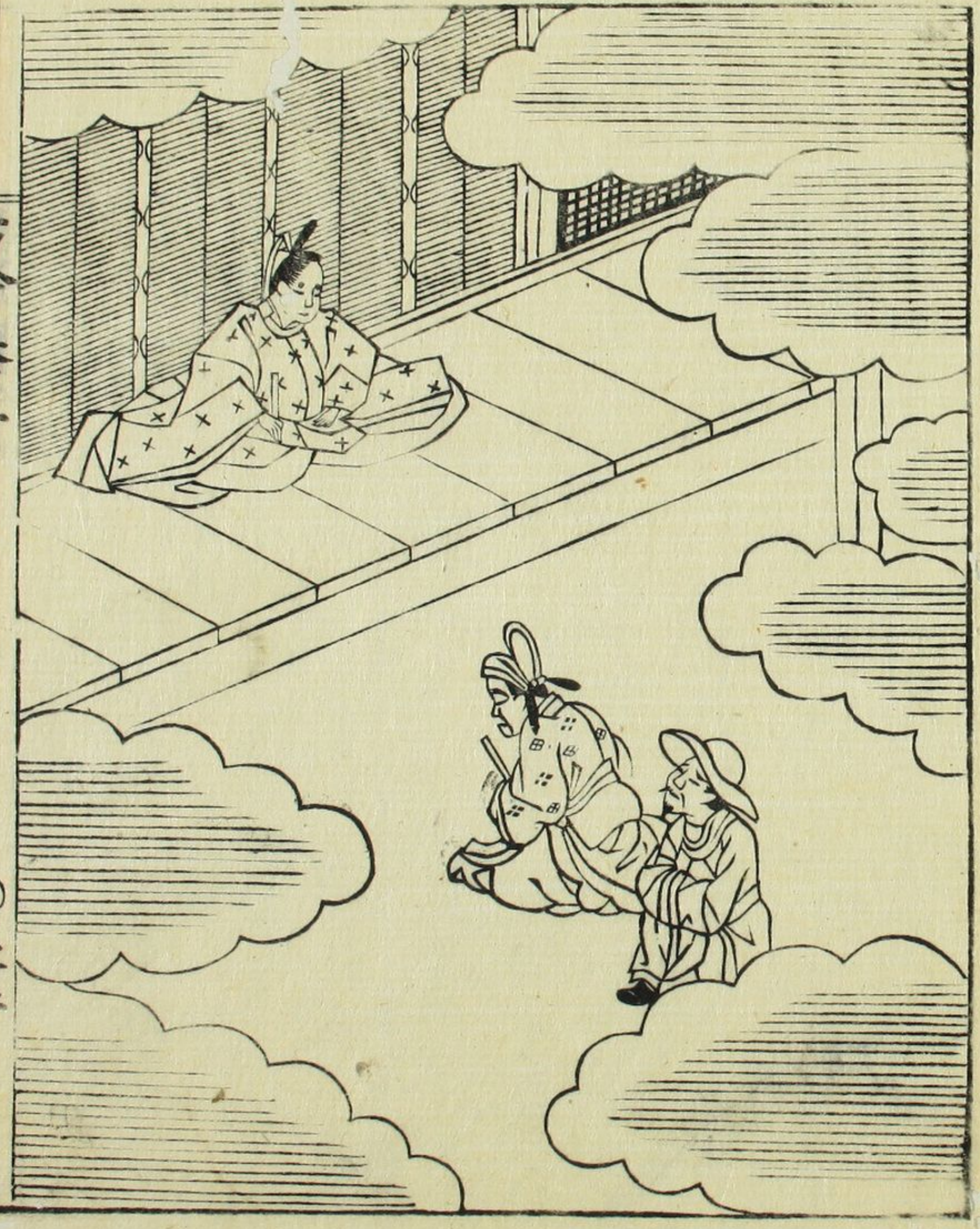
おちおちもわくし終るるに平二年八月十七日  
御尋ねのしきも御中内府御人お尋ね申す奉  
りせしれ御小才一日御尋ね申す御尋ねのしきも御尋ね  
せしめまひるに九条大御大御をよせありせり  
資信仲御のたふきてあきせりを御尋ね御尋ね  
御のたふして御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
な御尋ねの御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
小日記をよせまひるに御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね

御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
て御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね  
御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ねのしきも御尋ね



のきよのびのゆきとくちのりろりそれいまも  
 入せありゆきをり押来を垣圍て時々留ませれ  
 どり真あつるく永曆よりおとまりねむおけをくら  
 折らまへ

後白河院は徳神清よ若代の家よつせありま  
 たりをゆよ屋司松煙とつていあおおさるりをり  
 花山院は府中山を段入道あそ附右大納あていあおい  
 りせのころをゆおひまといの程の物ぞんまもく勅定ま  
 くれだおとくお大およまめやられなれどねとけきて  
 吾とさうてませあひまのその根除同の挑筆れ定





遊をりたる有るをきめてきたり小感歎のきりこみせり  
 建久の法月婦人の後指帰して三年ごまごまよりけりれ  
 形又近代昔余をよむ上ま中物とらぬといふれ  
 るよふたは又ゆふにまはしむるは海は三条なまは入  
 乃の月赤の耐さつふさうてめいふいふりきふは織者  
 の一絲とれまはゆふもほんともあられん秘人これ  
 同物成念せられり流るる内赤うらぐり流るりて巻を  
 うとまはく懐中ふれひまはかへて皆まはる同くまはせり  
 きたり毎下ごらのぞをまへ何とぬく内赤れきりけり  
 る成りゆふにまはるるぞあはれいふまはるるはだか

古今卷三

三十一







孝道一報とやら人孝時大報と打せり海一の象  
 ありおとくば先時を海流慈後の雲白中てあり一伸  
 を海流慈後の入たなれな長中てあり一は慈あり  
 ありとて系とせまひく由流せれなりは慈明流慈後  
 流のるありせり由ありびの後けりは慈にあり一の  
 はまじき海へくべ利合はる半おとせり一逆鱗を  
 て拙奈光親にせしつらひそて由慈やこれなり一  
 こといぐくなりせりおとせり

古今著聞集卷之三終



